

幼児期のサンタクロース体験に関する発達心理学的研究

富田 昌平 (中国学園大学子ども学部)

私たちの文化・社会では、サンタクロースは大人による扮装という形で子どもの前にしばしば現れる。これは、子どもにサンタクロースの存在を信じさせたいとする大人の願望の表れであるが、なぜ大人たちはそれほどまでに子どもにサンタクロースの存在を信じさせたがるのであろうか。

「子どもには夢を持って欲しい」、「子ども時代を想像豊かに過ごして欲しい」、これらは保育の現場でよく耳にする言葉である。これらの言葉からは、大人による子ども時代への郷愁も垣間見られるが、何よりもまず、ある強力な信念を感じ取ることができる。すなわち、「子ども時代の想像や空想の豊かさは、後の人生の成功と関係が深い」という信念。実際、このような信念は多くの研究者が支持するところであり、それ以上に多くの優れた児童文学作品が雄弁に物語っている。そして、子ども時代のサンタクロース体験はその代表格といえる。

本研究の目的は、幼児期におけるサンタクロース体験について発達心理学的な観点からその内実を探り、また、それによって幼児期におけるサンタクロース体験実践への提言を示すことである。具体的には、子ども一人ひとりへのインタビューを通して、体験の内容やその認識を明らかにする。

研究 1

方 法

被験児： H 市内の私立保育園の 4 歳児 20 名、5 歳児 20 名、6 歳児 22 名、計 62 名。

実施時期： 2001 年 12 月 20 日。

手続き： クリスマス会で大人が扮装したサンタからプレゼントをもらった一週間後に、園の一室で学生 4 人が個別にインタビューを行った。

質問内容： Q1:「これまでにサンタさんからプレゼントをもらったことはある？」 Q2:「それはどうやってもらったの？直接サンタさんからもらった？それとも朝起きたら枕元に置いてあった？」 Q3:「そのサンタさんは本物だと思う？」(直接もらったと回答した子どもにのみ)

結果と考察

4, 5 歳児では半数から 3 分の 2 が「直接もらった」と回答したが、6 歳児では 5 分の 1 と激減し、クリ

スマス会での扮装サンタとの出会いをサンタクロース体験として語らない子どもが多く見られた。扮装サンタに対する認識は 4 歳から 6 歳にかけて変化することが示唆された。

表 1 プレゼントをくれたサンタに対する認識 (%)

	4 歳児	5 歳児	6 歳児
直接—本物	40	25	9
直接—不明	10	5	9
直接—偽物	15	20	0
非直接	35	40	73
未経験	0	10	9

研究 2

方 法

被験児： O 町内の公立保育園の 4 歳児 28 名、5 歳児 25 名、6 歳児 30 名、計 83 名。

実施時期： 2002 年 12 月 5 日。

手続き： クリスマス会実施の一週間前に、園の一室で学生 3 人が個別にインタビューを行った。

質問内容： Q1:「クリスマスにプレゼントをもらったことある？」 Q2:「誰に？何を？どうやって？」 Q3:「これまでにサンタさんを見たことはある？」 Q4:「いつ？どこで？」 Q5:「どんな人？どんな格好？」 Q6:「その時サンタさんとお話した？どんなお話した？」 Q7:「サンタさんに会えると思う？それはどうして？」

結果と考察

子どもの大部分は「プレゼントをもらったことがある」と回答し、「サンタから」と主張した。しかし、「サンタから直接」という回答は加齢に伴い減少した。サンタの目撃や会話の経験についても加齢に伴い減少し、特に会話体験の減少が顕著であった。

表 2 プレゼントの贈り主に対する認識 (%)

	4 歳児	5 歳児	6 歳児
直接—サンタ	36	24	7
直接—親・祖父母	7	8	3
非直接—サンタ	39	36	67
非直接—不明	11	16	0
未経験	7	16	23

表3 サンタの目撃・会話体験 (%)

	4歳児	5歳児	6歳児
目撃と会話	54	16	10
目撃のみ	25	28	20
未経験	21	56	70

サンタの外見的特徴については多くの子どもが複数回答し、①赤い服、②おじいさん、③白いひげ、④赤い帽子、⑤白い袋、⑥黒い靴、⑦トナカイの順に多く見られた。また、サンタとの出会いの可能性については、①日頃の行い、②強い願い、③タイミング、④相応しい状況などがあげられた。

直接体験したサンタに言及しない傾向にあった6歳児でさえも、枕元にプレゼントを置いたのは恐らくサンタであると言い、サンタの特徴を数多くあげ、ある条件を満たせばサンタに会うことはできると回答した。このことから、直接体験によるサンタのリアリティの減退は、想像上のサンタのリアリティの減退に影響を及ぼしていないことがうかがえる。

研究3

方法

被験児： O町内の公立保育園の5歳児23名、6歳児33名、計56名。

実施時期： 2003年12月11日。

手続き： クリスマス会実施の一週間前に、園の一室で学生3人が個別に面接を行った。

質問内容： 架空のお友達“花子ちゃん”がいろいろな場所で出会ったサンタについて話し、それが本物か偽物かを花子ちゃんに代わって判断するよう要求した。①近所のデパートで出会ったサンタ、②保育園のクリスマス会で出会ったサンタ、③家の玄関で出会ったサンタ、④枕元にプレゼントを置いていたサンタ、⑤トナカイに乗って空を飛んでいたサンタ、⑥サンタの国に連れて行ってくれたサンタ。質問はランダムに行い、それぞれに絵を1枚提示した。

結果と考察

保育園やデパートなど家の外で出会ったサンタは、5歳児では3分の2が本物と判断したが、6歳児では3分の1と減少した。また、家の玄関で出会ったサンタも先の2つほどではないものの減少した。他方、家の寝室、空の上、遠い国で出会ったサンタについては5歳児と6歳児であまり変わりなかった。

5歳児は保育園、デパート、家の玄関で出会ったサンタが本物である理由として外見の類似性（…が

ある、…が似ている）をあげる者が多かったのに対し、6歳児ではそれは減少し、代わりに偽物である理由として状況の不適切さ（普通…しない、…にはいない、…に来ない）をあげる者が増加した。他方、家の寝室、空の上、遠い国で出会ったサンタを本物と判断した場合には、5、6歳児ともに状況の適切さをあげる者が多かった。彼らはサンタが夜にやって来たことや、空を飛んだこと、サンタの国から来たことをとりわけ重要視した。その一方で、偽物と判断した場合でも、サンタの実在性や神秘的な力を否定する回答は見られなかった。

表4 他者のサンタ体験に対する“本物”判断 (%)

	5歳児	6歳児
デパートサンタ	61	36
保育園サンタ	69	36
家の玄関サンタ	74	57
家の寝室サンタ	48	57
空の上サンタ	61	61
遠い国サンタ	61	61

総合考察

結果をまとめると次のようになる。(1) 幼児期において子どもは次第に大人が扮装したサンタを本物ではなく偽物と見なすようになる。(2) 偽物と見なすようになるが、そうした直接体験は想像上のサンタのリアリティの減退にあまり影響しないようである。6歳児でさえも、大部分がサンタの実在性を信じている。(3) 子どもはサンタについて多くのことを知っている。彼らにとって本物のサンタとは、外見が似ていることはもちろんであるが、夜、人々が寝静まった後に、トナカイが引くそりに乗って、空を飛んでやって来る、といった物語と整合していることが重要のようであった。

筆者の別の調査によると、広島県と山口県の公立幼稚園・保育園の80%以上がクリスマス会を行い、その際90%以上が扮装サンタを登場させている。これに対して「夢を壊す」などの指摘も一部であるが、それらの体験はサンタの実在性を否定する決定因とはならないことが本研究から示唆された。しかし一方で、子どもはサンタの外見や行動をよく観察していることから、サンタの“本物らしさ”をきちんと研究した上で子どもたちの前に登場させることが重要であることが示唆された。

(Key Words: ファンタジー, 本物-偽物判断, 幼児)